

他国商人禁止の地・薩摩藩で たくましく商売を続けた

富山の薬売り・薩摩組

**昆布船廻漕業(北前船)で
財をなした能登屋(密田家)**

富山の薬売りは、全国を22に分け、関東組、五畿内組、薩摩組などの組制度を持っており、その中で薩摩組26脚(脚とは、公権力による営業免許で、「株」にあたる)は、昆布を通して深く薩摩藩と密着していた。薩摩組の中でも、能登屋(現密田家)は、昆布船廻漕業(北前船)にも関わり、財をなし、北陸銀行の前身の一つである第百二十三国立銀行を発起人となって設立した富山有数の名家である。

ちなみに、能登屋の持船の北前船「長者丸」(650石積み21反帆)は、天保9年(1838)、誰にも知られずに昆布を薩摩へ運ぶため、西廻航路(日本海側)より危険な東廻航路(太平洋)を航行中に三陸沖で暴風雨にあい、遭難している。

**富山の薬売りが運んだ
昆布が薩摩藩を救った**

薩摩藩は、江戸初期から、江戸城の修築、上野寛永寺本堂の建造、木曾川治水工事など、幕府から命じられた仕事のために負債が膨らみ、文政10年(1827)には500万両にも達していた。当時の薩摩藩の経常収支は年12~14万両なので、いかに巨額かわかる。

薩摩藩では、1821年前後から、支配下の琉球(現在の沖縄県)を通じて大量の昆布を中国(清)に輸出し始めたとみられている。

昆布は、中国大陸に蔓延する風土病・甲状腺腫によく効くヨード・カリウム・カルシウムなどを大量に含むため、中国人からの需要が高かった。薩摩藩は、昆布輸出の代償として、中国から薬種(竜腦・沈香・山帰来、辰砂、麝香、牛黄など)を

得て、これが日本で高く売れた。越

中もそれを買っている。しかし、この中流貿易は、薬種の抜荷(密貿易)であったため、秘密にしておく必要があった。それが、「長者丸」の遭難につながったといえる。

1827年、当時の藩主・島津斉興は、調所笑左衛門を抜擢し、財政再建を命じた。彼は、江戸・京・大阪などからの負債を250年賦の無利子償還とし、砂糖等の専売制も実施し、二セ金づくりにも手をそめた。昆布の輸出も続けた。ピーク時には、日本の昆布生産量の10%近くの400~500tが輸出されていたと推定されている。

薩摩藩は次第に財を蓄え、1850年代には、鹿児島にガス灯・ガラス・陶磁器・紡績をはじめ、火薬・弾薬・小銃・大砲などの洋式の製造所を建設するまでになった。日本最初の工業団地で、「集成

館」と名付けられた。

**幕末、薩摩藩のために
情報を集めた薬売り**

薩摩藩は、「冥土の飛脚」といつて入国が難しく、たとえ入国しても帰るのは難しいといわれた。正貨が藩外に持ち出されるのを嫌い、薩摩領内への他国商人の出入りを厳禁していたためだ。にもかかわらず、富山の薬売り商人が入れたのは、合葉(数種の葉を調合した葉)自体が良かったことに加え、昆布の力が大きかったからである。しかし、その富山の薬売りでさえも、差留(行商停止)を何度も経験している。しかし、くじけず努力した。恩を売っておけば薩摩藩の心証をよくし、薬売りの商いを続けられると、薩摩組も必死で運動を行ない、その都度、差留解除を勝ち取っている。

幕末、薩摩組は、ただならぬ非常事態を察して、薩摩藩へ影の助っ人として、宮嶋五兵衛と杉井伊兵衛をひそかに送りこんでいる。両者は、寺田屋の変、鳥羽伏見の戦いの際にも、敢然としてその地にとどまり、命を賭して大和・河内一帯の情報集めに東奔西走して任務を果たしたという。功を褒賞して、島津久光公から、宮嶋五兵衛には、名刀・備前景光の太刀一振りと琉球の紺上布・白上布などが贈られたという。このような働きにより、当時の差留が解かれたという。

また、吉沢屋(高桑家)も、幕末、京の薩摩藩邸に勤めて、隠密として、また、武器の輸送にも活躍したという。

■参考文献／「昆布を運んだ北前船 昆布食文化と薬売りの口マン」(塩照夫著・北國新聞社)、Wikipedia